

海外で好評の英文誌



JAPANESE ALPINE NEWS

第2号発行

海外委員会 中村 保



貴重な写真・地図・ルート図が豊富に掲載されている

『ジャパニーズ・アルパイン・ニュース』第2号が、4月に発行されました。

昨年10月の創刊号に対する反応は概ね好評です。初の日本発の山岳情報誌ですので、反響に懸念もしましたが、UIAAは当然として、とりわけ英語圏の国々から関心が寄せられています。英国山岳会、英国エヴェレスト財団、アメリカ山岳会、ニュージーランド山岳会、スペインの山岳団体から高い評価をいただいています。

また、多くの著名な登山家、例えばアメリカのウォッシュバウン、クリンチ、カナダのモティマー、英国のルーベンスやグリフィン、オーストラリアのディームベルガー、ニュージーランドのナンカビス、

UIAAの遠征情報担当役員、英国山岳会図書館の責任者等の諸氏からも、励みになる便りが寄せられています。

これからの課題として、海外からのニーズを敏感に取り入れ、内容のさらなる充実に努めることは言うまでもありませんが、欧米偏重に陥らないように、アジアの国々への発信にも、より関心を払います。

第2号は本体とサプレメンタリー・ペーパーの2分冊になりました。それぞれB5サイズ・48ページの構成です。

世界の約1100の山岳団体と、300人を超える登山家(山岳誌編集者を含む)に送付しました。次ページに内容の概略をご紹介します。



2002年(平成14年)
5月号(No. 684)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL●<http://www.jac.or.jp>
e-mail●jac-info@jac.or.jp

目次

『Japanese Alpine News』Vol.2発行・・・1
報告

図書(委)・山岳図書を語る・・・3
自然保護(委)・三頭山観察会・・・3

支部だより

岐阜・冬季小集会・笠置山・・・4

東海・岳人写真展・山の絵展・・・4

宮崎・夢描く千年の森植樹・・・5

海外の山・・・6

東西南北

常圧低酸素の可能性・・・7

『図書紹介』雑感・・・7

登山と呼吸(中)・・・9

護美のこと・・・10

Climbing & Medicine・9・・・11

図書紹介・・・12

『コー・ホイエ・イラーン』『山

靴の跡』『新・北アルプス博物誌』

『アルプスの蒼い空』『凍る体

一低体温症の恐怖』『ヒマラヤ・

チベット縦横無尽』『百名山の人

一深田久弥伝』『BERG2002』

図書受入報告・・・14

会務報告・・・16

INFORMATION・・・18

ルーム日誌・・・19

▶日本山岳会事務(含図書館)取扱時間
月・火・木・・・10~20時
水・金・・・13~20時
第2、第4土曜日・・・閉室
第1、第3、第5土曜日・・・10~18時

JAPANESE ALPINE

NEWS 本体(B5サイズ 48

ページ 地図15 ルート図3

写真1カラー1・モノクロ21

●ローツェ南壁・2001冬期登

攀、2003年冬に再挑戦(JA
C東海支部) 田辺 治

●アフガン・パミールへの旅、禁
断のワハン回廊を行く 平位 剛

●クラー・カンリ中央峰・東峰初
登とプマ・ユムコ湖調査(東海
大・チベット大) 出利葉義次

●チベットのアルプスへ、未踏の
東チベット念青唐古拉山脈東部を
探る 中村 保

●ヤンラ・カンリ未踏の北面に挑
む、チベット側からガネツシュ・
ヒマールへ 山森欣一

●ミャンマー北部カチン州―蝶採
集紀行1998〜2001

渡辺康之

●クライミング&エクスペディシ
ョン

中国・崑崙山脈西部、セリク・
グラム・ムスターグ初登頂

大西 浩

中国・横断山脈、四川省西部―
シャングリラの花崗岩の岩峰登攀

大内尚樹

日本アルプスから冬のアラス

カ・マツキンリーへ―若者の単独
行 栗秋正寿

山野井・クルティカーカラコラ
ムのピアチエラヒ中央峰に新ルー
ト 中村 保

知られざるブータン・ヒマラヤ、
テリ・カン山域探査(千葉大)

吉永英明

●メコン川水源(中国青海省)の
確定、地理上の最後の謎が明らか
に ビーター・ウイン

●日本ヒマラヤ協会のデータ・フ
アイル2001ヒマラヤ―日本
隊の活動記録 山森欣一

●日本人の中国登山20年、19
79〜2000 児玉 茂

SUPPLEMENTARY

PAPERS 分冊(B5サイズ
48ページ カラー地図3 写真
1カラー28・モノクロ4)

近年西ネパールの未踏地域の探
査に精力的に取り組んでこられた大
阪山の会の大西保・吉永定雄両氏
のレポートです。添付の地図ムス
タンは最新の情報をもとに描かれ
た、大変価値ある労作です。チベ
ット仏教僧院の文化遺産や古代の
仏教遺跡の紹介なども貴重な記録
です。

●色刷り地図・西ネパールの新し

●今年も「さんげん」くじくぞ

今年の上高地は、4月27日に
開山祭を行い、山研も同時にオ
ープンしました。

山研は会員の皆様のクラブハ
ウスです。支部・委員会・同好
会などの親睦、新人会員の仲間
作りの場や、ゲストハウスとし
て内外の他団体との交流など、
宿泊施設として利用されていま
す。

資料室は山岳会の常設のショ
ールームとして、会の歴史を展
示したり、研究の発表・講習会
などを行っています。支部や同
好会単位でぜひご利用ください。
山研では今年もさまざまな催
しを企画しております。

「紅葉の安房峠より焼岳越え」
6月はウェストン祭以降、利
用者は比較的少なくなり、静か
な新緑の上高地が楽しめます。
学校も週休2日の時代、ご家
族やお仲間と山研へどうぞ！
(配偶者は会員と同一利用料、小学
生以下は半額です)

●6月1日
「新入会員を対象とした徳本
峠越えとウェストン祭」(申し込
みは前号参照)

●9月15・16日
「フチ・オータムコンサート」
(昨年同様チロル音楽とヨーデ
ルの夕べ)

●10月19・20日

い地形図「MUSTANG」

●ムスタン探検史、1865年か
らの100年 大西 保

●ムスタン北西部の探査と未踏峰
の初登頂 大西 保

●カリガンダキ上流部の僧院を訪
ねて 吉永定雄

このアルパイン・ニュースは海
外向けのジャーナルですので、日

本山岳会会員の皆様には配布され
ませんが、ご希望の方には有料で
お分けいたします。ただし、部数
に制限があります。

本体……1部 1000円
(送料込) 200部限定

分冊……1部 1000円
(送料込) 50部限定

*購読ご希望の方は、日本山岳会
事務局にお申込みください。

報告

REPORT
5月

図書委員会

第33回山岳図書を語る夕べ

1月31日、日本山岳会の集会所はあふれんばかりの盛況。『山麓亭百話』(上中下巻)が完結したのを機に、山の本に、低山歩きに、と独自の山の世界を展開し、柔らかい筆致のなかに鋭い指摘がひそむエッセイにファンが多い著者、横山厚夫さんを迎えて、豊富な山歩きに裏打ちされた話題を披露していただいた。その報告の前に『山麓亭百話』を少し紹介したい。

上巻が出たのが1999年8月中巻は2000年7月、下巻20



話題豊富な横山厚夫氏

01年11月(各1400円、白山書房刊)というスピード出版ぶり、山に関する合計100の話題が内容も濃くぎつりとつまっている。

山岳図書はもちろんのこと、映画やビデオ、写真やカメラから、各巻の表紙を飾る切手にまつわる話、もちろん山をきつかけとした人との交流も語られる。横山節とも言うべき軽妙洒落な文体で、私たちをもうひとつの山の世界へいざなってくれるという仕組みの本である。そして1話終わることに、その話題に関係する図書が紹介されているのが、また横山さんならではの心憎い構成だ。

当日はこれらの本の内容をめぐって、あるいは若かりし日の横山さんの山歩きについて、図書担当理事の宮下啓三さんの質問に答えるという形で話が弾んだ。また多くのガイドブックをものにされて

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

いることもあって、その方面へも話が広がり、現代ガイドブック考にまで進展したのは、むべなるかなである。

深田久弥氏と親しく接してこられたことから、深田さん愛用のカメラにまつわる新しい話題がでていずれこれらもまた横山さんの独特の文章で語られることだろうと期待する。

話題は最近矢継ぎ早に出版された、山口耀久著『定本北八彷徨』『八ヶ岳挽歌』(共に平凡社)にまで及んだ。図書委員会では「山岳史懇談会」に山口さんをお招きする予定があり、次にはどんな話が聞けるかと、一同、期待しきりだった。

(泉 久恵)

自然保護委員会

三頭山自然観察会

3月31日(日)9時、参加者22名は八王子駅南口をチャーターしたバスで出発。

三頭山は江戸時代から「お止め山」として伐採を免れてきたブナの原生林が残され、東京都では数少ないブナの成育地である。南東の中腹は「都民の森」として整備

され、誰でも簡単に山頂を踏めるようになっていた。

一行は木材チップが敷きつめてある遊歩道を、野鳥の声を聞きながら登り始める。巨木のトチノキが目に残る。エイザンスミレ、イチリンソウ、ハシリドコ、ヤマネコノメが咲いている。三頭大滝でひと休み。今年は桜の開花が早く、都心ではすでに葉桜だが、ここはまだ木々の芽も固い。

ミズナラ、カツラ、サワグルミなど湿り気を好む樹木を見ながら沢筋を登ると、雪がまだ残っている。地質、地形と森林分布について説明を受ける。ムシカリ峠で昼食。ブナの巨木が多く、やわらかな春の陽射しがなんとも心地いい。そこからひと息で山頂へ。記念写真を撮り、ダケカンバ、ブナ、カエデの道を鞘口峠へ向かい、一気につづら折りの道を木材工芸センター、森林館へと下りる。

12年前に開設された三頭山「都民の森」。かつての自然を知る人はブナ林を壊して作った遊歩道や施設を見て、やりきれない気持ちでここを歩くという。自然観察をしながら、ここでも山の自然保護の難しさを考えた。(岡田 陽子)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
リポートします。

岐阜支部

冬季現地小集会・笠置山

笠置山は恵那市の北に位置する
秀麗な姿の独立峰である。3月24
日、冬季の小集会としては雪が少
なく、適当な山として選ばれた。

午前9時恵那市笠置町の姫栗コミ
ュニティ広場に集合。新年の初登
山にあたり、支部長よりひと言挨拶、特別参加の地元安田氏が歓迎の言葉を述べ、登山開始。最初
は舗装道路を約1^キ、別荘のある
地点で未舗装になる。ヒノキ林の
岩のゴロゴロ道を約1.5^キ、最初の
林道を横切るところに建つ小さな
記帳小屋へ一気に向かう。

小休止の後、登山道へ。びっく

りしたのはコンクリートの杭で作
られた整備された階段がヒトツバ
タゴのところまであったことだ。
ヒトツバタゴは大正8年に発見さ
れ、大正12年に国の天然記念物の
指定を受けた。6月ごろに白い雪
をかぶったように花がいつぱい咲
くそうだが、今は枯れ枝のように
ひっそりしていた。

さらによく手入れされたスギや
ヒノキの林の、岩がゴロゴロした
道を進む。小さな沢を横切り登山
道を行くと、再び林道に出た(8
合目)。この林道は左に進むと、
キャンプ場や頂上近くまで行ける。



まだ雪の残る笠置山神社前にて

ここを横切り、さらに進むと小さ
な笹原の道だが、登山道大改修の
ため、頂上まで目の高さの索道が
右に左に張っており、注意して登
る。樹林帯が薄暗くなったところ
に最後の水場があり、水は結構出
ていた。最後の登りは木の根が階
段状になった急登、凍結して滑る
ところもあった。ここを過ぎると
樹間が明るくなり、笠置山神社大
権現の広い道。すぐに鳥居が現れ、
頂上の神社に到着。

神社前は日当たりが悪く、雪が
10^{センチ}くらいあるため、場所を移動
し、恒例の万歳と乾杯で少し早い
昼食。ここからの展望は望めない
が、5分くらい南側にある物見岩
の巨岩の上に立つと、恵那山、裏
木曾の山々が一望できる。安田氏
の案内で回り、さらに中野方面に
は丸太で組んだ展望台があり、御
岳、白山方面も望めた。神社裏の
露岩の中に「ヒカリゴケ」を見る
ことができるというので、一部の
者はひと回りした(ヒカリゴケは
光っていなかった)。きた道を折
り返し下山し、午後3時現地にて
解散した。

参加者31人。登り2時間20分、
下り1時間30分。(中島 眞一)

東海支部

第8回岳人写真展・ 第1回山の絵展

3月12日(火)から17日(日)まで、第
8回岳人写真展・第1回山の絵展
が、名古屋市民ギャラリー第1・
2展示場で、東海支部設立40周年
記念事業の一環として開催されま
した。

開催にあたり、フィルムビデオ
委員会の羽田栄治氏および、中日
新聞社、中部日本放送(株)のご支援
により、皇太子殿下、橋本龍太郎
元総理大臣、風見武秀名誉会員に
特別出品していただきました。さ
らに中日新聞に2日間連載された
ことと、FM放送「DANVO」
での生放送によるPRが、動員増
の有力なきっかけとなりました。
コーナー別に、ヒマラヤ・インド
ヒマラヤ・ヨーロッパアルプス・
中国・国内・忘れ得ぬ山・思い出
の山麓と、併設の「山の絵展」も
あり、前回より展示会場をひとつ
増やし、ポリウムある展示にな
りました。

来場者の中には、皇太子殿下や
橋本元総理の写真について、本物
ですか、と尋ねたり、ローツェ南

壁での断崖絶壁のザイル・アイゼンさばきなど、さすがに山屋の写真展だな、とうなる人もいました。

回を重ねるに従い、支部員・支部友のレベルアップが図られ、成功の糧となりました。次回は平成15年11・12月、会場を3会場に増設し、盛大なる第9回岳人写真展を計画しています。

展示会終了後18時より会場地下1階「嘉文」で、総勢32名が参加の納会です。林実行委員長からの結果報告、中世古支部長の挨拶の後、橋村氏の乾杯の音頭で盛大に幕を開けました。成功のうちに終わった写真展の作品の話題に花が咲き、あつという間に時が過ぎ、寺西副支部長の恒例の万歳三唱で無事幕を閉じました。(林 芳弘)

宮崎支部

夢描く千年の森植樹

◇清掃登山と森づくり

山岳景観に親しむ私たちは、自然が幾星霜の時空を経て創造した森林や溪谷などを、山歩きによって多少とも傷つけている。そのお詫びと恩返しをの思いを込めて、宮崎支部では毎年、登山者の多い山

の道筋で植生の保護を図ろうと、清掃登山を行っている。

平成13年4月、宮崎支部定例総会で規約の一部改正を行い、これまでの消極的活動から積極的活動への転換を図るため、自然保護委員会などを設置し、委員会主導による活動を展開することとした。

同年8月には「高岡町水源の森」の下草刈作業に、11月には西都市上三財地区の「ロキシール・JAC宮崎支部の森」で前原満之会員の育苗したヤマザクラ・カシ・



田野の森での植樹参加者

クスギなどの植樹を行ってきた。

◇国際山岳年記念植樹

平成14年「2002年国際山岳年」を記念して植樹を計画し、「小鳥にやさしい森づくり推進委員会」の提供によるヤマザクラ・カシ・クスなど1000本を植樹した。

第1班は3月17日支部会員41人の参加を得て、県南地区田野町の朝陣野(みやざき百名山No.94)の山麓・尾八重の山林に500本植樹をした。3日間隔にクス・タブ・カシ・モミジとヤマザクラ群に分割し、掘り込み、植え付け、日覆いの要領を学習して作業開始。

育苗を運ぶ者、植え床を掘る者、植樹後の日覆いをする者と分担が生まれ、快調に作業は進む。1時間後、10分の休憩を宣言するが、5分もすると作業を開始するなど活気にあふれ、予定より早く12時20分に植樹は終了した。

昼食には猪鍋が振る舞われ、大碗で4杯たいらげる者もいた。昼食後、岡本真理子会員が携行してきたキーボードの伴奏で「日向山旅賛歌」思い出のスカイラインを合唱し、散会した。

第2班は3月21日の休日を利用

して県西部、野尻町漆野原地区に支部会員26人が参加して、春雨降る中で第1班同様に500本と前原会長が育苗したクスギ50本の植樹を行った。雨にもめげず汗を流す。昼食に提供された「そばのごった煮」の味は格別であった。

植樹後の数年は、この山の管理など山との関わり合いが生まれ、1000年の森を夢見てさわやかな活動が展開されるであろう。やがては水源の森、漁民の森などがスクラムを組み、大きな輪となつて自然保護活動への意識が高まることを期待したい。(井野元 繁)

自分の想いを、「本」にしませんか。

自費出版

——山岳書をつくるプロが、発刊のお手伝いをします——

山行記録集のほか、紀行・随筆・歌集・句集・詩集・写真集・記念誌などを、お望みの形や様式でつくることができます。まずは、お気軽にご相談ください。

詳しい資料をお送りします。お問い合わせ・お申し込みは——

Tel. 075-212-1320 Fax. 075-212-1321
E-mail work@skyblue.ocn.ne.jp

編集プロダクション(竹内康之 会員No.10025)
TAKEUCHI
GRAPHICARTS & EDITORIAL

〒604-0382 京都府京都市南区九条1丁目1番地503号 TEL.075-212-1320

海外の山

登頂半世紀を迎えた
エヴェレスト

江本 嘉伸



若き日のテンジン(ナンダ・デヴィにて)

恒例とはいえ、世界最高峰は今年も5月になって話題で賑わっている。アメリカ隊のエイドリアン・ネイチャーは、北のチベット側から登頂後、北壁初のスキー滑降をめざし、ポーランドのピョートル・プステルニクは14座の8000峰に王手をかけ、その後「3つの王冠」と名付けた挑戦を表明している。「14座」だけでなく七大陸それぞれの「最高峰」と「第2の高峰」の頂きに立つというのである。「七大陸第2の高峰」については、23歳の東大生、山田淳が話したことがある。K2を含め「大陸で2番目に高い山を登ることのほうが難しく価値があるのでは」ということであった。

その山田はラッセル・ブライスの公募登山隊に参加して、とりあえず七大陸最年少登頂をめざしている。50歳になってから8000峰に次々に登っている渡辺玉枝(63)の女

性最高齢登頂への挑戦、今回は隊長としてではなく桐生隊のメンバーとして頂上をねらう今井通子など、日本のベテランのチャレンジも目立っている。

いろいろな話題が企画される近年のエヴェレスト登山でテーマのひとつは「歴史」である。この春は「スイス隊50周年記念登山計画」と「英国隊50周年計画」がはちあわせをした。

1952年、春、秋の2度行われたスイス隊の挑戦を英国人たちは緊張とともに見守った。前年の51年、エリック・シプトンを隊長とする英国隊がはじめてクーンブ氷河のアイスフォールを突破する新ルートを見出したのに、52年の許可はスイスに与えられたのだ。

彼らは、ウエスタン・クウムから「ジュネバ・スパー(ジュネーブ人の岩稜)」と名付けた支尾根を登って初めてサウスコルに達し、5月28日

にはレイモン・ランベールとテンジン・ノルゲイの2人が頂上直下8595メートルの高所まで到達した。英国人たちは、さぞはらはらしたであろう。テンジンとランベールの友情が深まった登攀でもあった。

烈風に悩まされた秋の挑戦も8100メートルとなり、結果は翌53年の英国隊にゆだねられた。しかし、ちょうど半世紀前、頂上直下2500メートルまで迫ったスイス人たちの頑張りを後世は評価すべし、と今回の50周年登山が企画されたのである。

一方、アメリカのピート・アサンズ(エヴェレスト6回登頂者)を隊長とし、ヒラリー卿の子息であるピーター・ヒラリー(もう54歳だ)、テンジンの子どもジャムリン・ノルゲイらをメンバーとする「英国隊登頂記念隊」も、活動にはいった。この隊は、来年5月29日の「正規の」エヴェレスト登頂50周年記念日に放映が間に合うよう、今回はテレビ・ドキュメンタリー撮影がおもな目的だ。

ふたつの隊を結ぶのが、テンジン・ノルゲイの存在である。スイス隊にはジャン・トロワイエら著名なクライマーのほか、ランベールの息子のイープ・ランベール、テンジンの孫のタシ・テンジンが参加してい

る。テンジン・ノルゲイは2人の妻を病気で亡くし、3人の妻と結婚しているが、タシは最初の妻、ダワ・プティの長女の息子にあたる。97年にエヴェレストに登頂した時は、「はじめての3代の登頂」と話題になった。一方、ジャムリンは3人目の妻、ダクの息子で37歳。96年春、難波康子らが遭難したあの悲劇の際、アイマックス映画撮影隊の「主役」の一人として居合せ、後に登頂を果たしている。

テンジン・ノルゲイは、世界最高峰に立ちたい、という一人の登山家として強い意志にあふれたサードだった、と伝えられる。エヴェレスト初登頂争いにスイス、英国がしのぎをけずり、英国隊の人選をめぐる複雑な状況が展開された際(たとえば、51年初めてクーンブ氷河からのルートを見出したシプトンは外され、代わりにジョン・ハントが隊長になった)も、テンジンだけは終始「別格」であった。

ところで、日本人のベテランといえば、来年「70歳のエヴェレスト登頂」をめざす三浦雄一郎が長男とともに5月9日、チョー・オユーに登頂した。96歳の現役スキーヤーである父の「遺伝」であろうか。脱帽。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

常圧低酸素の可能性

貫田 宗男

本誌のClimbing & Medicineの欄で、大野秀樹先生が書かれた「登山隊員は遺伝子で選別される?」の内容は、高みを目指す者にとっては衝撃的であった。

確かに、いわゆる高所に強い人弱い人がいることは経験的に知っていたし、シエルパ・ガイドやキリマンジャロ山のガイドたちが、アジア人は欧米人に比べて高所に弱いと話しているのを、何度か聞いたことがある。

しかし高所を目指す登山者たらんとする人が、検査の結果「あなたのACE遺伝子は、高所に弱いDD型ですよ」などといった簡単な

に宣言されてしまったら、トレーニングをする気も失せてしまわないだろうか。

もちろん酸素無補給登山にただ憧れ、自分の実力も認識せず、やみくもに高みを目指した揚げ句、無駄死にするような事例は防げるかもしれない、と思ったりもするのだが……。

それでは体質的に高所に弱い人にとって、トレーニングの効果は全く期待できないのであろうか。これまた過去に、何百人かを高所に案内した経験からだが、高所未経験者が事前に低圧タンクなどを使って高所体験をした場合、かなりの効果が認められたような気がする。

ただ一般人の人にとって、施設が大がかりな低圧タンクを利用する

ことは簡単なことではない。そこで考案されたのは、施設の簡単な常圧低酸素室なるもの。酸素の割合を多くした空気をこの室内に送り込み、気圧は平地のままで酸素濃度を下げる装置である。

昔は窒素ガスを混入させていたらしいが、現在では特殊な膜を利用した低酸素制御装置が開発され安全性も高まった。そして廉価で小型のものが販売されるようになってい

最近、国内のあるトレッキング会社が、一度に数人が低酸素トレーニングをすることができこの常圧低酸素室(商品名アルティキューブ)を購入し、自社の事務所に設置した。これは高所未経験者や、高所に「弱い」人にとっては朗報であろう。

このシミュレーションで高所に「弱い」ということがわかってても、悲観する必要はない。トレーニング効果があってもいいし、事前に慎重な対策を練ることができ

るのだ。まずは己を知ること。自分が高所に「弱い」と認識しても、そこから英知を駆使し、あらゆる対策を講じて、そのハンディを克服す

る。これも高所登山、トレッキングの楽しみのひとつであろう。自分だけでたてた諸々の作戦が成功した場合、その充足感、酸素を使ったとしても、酸素無補給登山に匹敵するものかもしれない。

ちなみに私のACE遺伝子は、DD型ではないものの、高所に強いと言われるII型でもなく、その中間であるID型であった。次回、高所に登る際には、この常圧低酸素室でのトレーニングを、ぜひ試してみようと思っている。

「図書紹介」雑感

根深 誠

私はもの書きを生業とし、かつ本会の一会員でもあることから、上梓のたびにそれが山野にかかわるものであれば、本会に拙著を寄贈してきたし、ときには本誌「図書紹介」の欄でも何度か取り上げていただいたことがある。

しかしこのたび「2月号No681」で取り上げられた、白神山地の入山禁止・規制に関する拙著2冊については、短い紹介文の中で2カ所にわたって重大な誤りが見

られ、評者の軽薄な、または一知半解とも思われる見識に憤り、過日、私は関係者に抗議文を郵送し本誌に掲載を求めた次第である。

しかしながら、その抗議文は400字詰め原稿用紙に換算すれば12枚ほどになり、長文につき掲載不可能ということで「1800字以内」に留めてほしいという内容の返信を、図書担当理事から頂戴した。

私の立場からすれば、これではまさに「腰砕け」の感がある。誤りを指摘され、その非を認めて潔く謝るのならともかく、あるいは訂正記事でも掲載するのならいざ知らず、短く書き直しを迫るというこの対応策には、抗議者としての私に尻拭いをさせようとする不純な感情が含まれてはいないだろうか。そういう疑念を抱かずにはられない。

にもかかわらず、なかばしらく気分度こうして抗議文の一部を用いつつ再度筆をとるのは、もとより関係者の意を汲んでのことである。と同時に、実態を無視した抽象的な考え方が誤解を生み、それによって入山禁止・規制が世論を形成していることを、遺憾に思

うからである。

それではまず、図書紹介文に見られる評者の基本的な誤りについて指摘する。

①「かつて青秋林道阻止を共闘した白神山地NGO会議」とあるが、そもそもこのNGOは青秋林道建設が中止になって以降、白神山地世界遺産登録が決定した翌1994年に結成された、入山禁止を標榜する傀儡組織だった。したがって林道建設反対運動の時点では存在しなかったのであり、共闘できようはずもない。

②「禁止・規制を外した場合、オーバーユースにどう対処したらよいのだろうか」と評者は述べているが、これは場合によっては、つまりそれが現実ならばのことだが、山の好きな登山者の良識と照らし合わせて無視できない問題といえる。しかし現実でなければ、それは尾瀬ヶ原などと異なり、空理空論ではない。

だが、②に象徴される空理空論こそが、紹介文にも掲げられている弘前大学教授や、その配下にあるNGOなど、白神山地に規制の網をかぶせる側の常套句なのである。しかも学術関係者は例外だと

いう。評者もまた、それを支持する側に組み込まれているように思われてならない。無知ゆえに抽象的概念に翻弄されて、とんちんかなことを言っているのである。それではいけないと思う。抽象論ではなく実態をふまえて、より具体的に論じるべきだと思う。

ちなみにオーバーユースでときに話題になる、東西6^キ南北2^キの尾瀬ヶ原では、年間の入山者数は50万人前後という。白神山地の世界遺産地域の場合、面積は尾瀬ヶ原の10数倍はあるかと思うが、当局の調査によると、入山者数は1997年513人、2001年701人、2002年846人と

たしかに増加の傾向がみられる。しかし、これを尾瀬ヶ原と同規模の面積にたとえれば、わずかに年間数十人であり、桁違いに少ない。ことほど左様に、白神山地では「オーバーユース」が報告され

たり問題化したことは一度もないのである。これは入山禁止・規制が功を奏しているのではなく、山域内に一般登山道がほとんどないからであり、山自体の地勢が一般登山者を拒んでいるのである。いずれ、この入山禁止・規制の措置

は廃止の方向にある。

こうした実態を無視した「入山禁止・規制」の欺瞞性を論破するのが、拙著2冊の根幹部分なのである。にもかかわらず評者は、根幹部分を読んでおらず、あるいは読んでも理解できないのか、入山禁止・規制派と同じことを言っている。あまりにも評者は実態を知らなすぎるし、拙著の内容を理解していない。

たとえば評者は、入山禁止・規制措置に「著者は真つ向から反対する」と記しているが、登山が内包する自由な精神の発露を尊重すれば、当然ではないのか。しかし、それも前述のごとく「良識」から判断し、それについても触れているのである。「現状ではまずありえないことながら、仮にオーバーユースなどの問題から、不幸にして規制が必要な状況になったとしても、要は、そこに根づいた文化や歴史をふまえて論じることが望ましい」「局部的に生じる自然破壊は、実態を調査したうえで、規制措置がとられてしかるべきだろう」評者はどこに目をむけて紹介文を書いているのだろうか。読者の誤解を招くものである。まったく

もって嘆かわしく、破廉恥な無謀さを感じずにはいられない。

それはともかく最後に、拙著から一言引用しよう。「入山の禁止や規制は、春秋林道建設反対運動に端を発した、いわゆる白神問題の本質からすれば、議論の方向それ自体がズレているのだ。そうではなく、人間と自然とのかかわりを視座にすえて、破壊された自然を再生復元させることが明日への課題ではないだろうか」

そして本会は当該支部を中心に来るべき創立100周年記念事業の一環としてそれを実施しているのである。会員諸兄の参画を望む。

登山と呼吸(中)

千葉 重美

■横隔膜が脳を刺激する呼吸

呼吸はその生物が生存していることを立証する、必要不可欠な行為である。この呼吸を断つことによって、生命を終了することがある。通常呼吸は意識することなく行われているだけに、呼吸を断つことは瞬間死にいたることであり通常は考えられない。それゆえ難

行である。

釈尊・シンダーダ・ゴードマ・ブツダはあえてこれを行い、苦行の世界を切り開いていった。ブツダは生・老・病・死の4つの苦悩を解決するため、カピラ城を出て苦行生活に6年間の歳月を費やした。断食・断息して、風雨・雷・寒暑に耐えたり、棘の床に寝る、または立ち続ける。あるいは害虫・害獣への対処で苦悩体験をする。髭や髪の毛を抜く。体に油を塗り、塵埃を浴びたり屍体や首の散らばり積まれた墓場で夜を明かす。その皇子があえて北インド・ネパールの地で修行したといわれる行為は、考えられないような自然環境の厳しい熱帯性気候の中では理解できないわけではない。わかるような気もする。

息を止める苦行は断息というがこれは3〜4分で七転八倒の苦しみとなり、そこから独自の呼吸を分析。これが①数息②相隨③止④觀⑤環⑥淨の6段階になり、出息長の呼吸となり、焦り、怒り、妬み、悶え、うろたえ、吸った息を止める。胸に力を入れて息を止める「怒責(どせき)」は理解しがたいう行為である。

人間社会において生・老・病・死にはストップをかけられない。

釈尊は虚無を蹴飛ばし、四聖諦(苦・集・滅・道)が処方された中から心を込めた呼吸(アナパーナ・サチ)安般守意を体制のびづけるのである。これは出る息(adane)に長く、入る息(ane)に短く、二息を確認して通常無意識にしている呼吸を意識化させるものである。すなわち自在の心で慈念の意で入息、出息を念じつつ行う自己認識により確立する。(参照 村木弘昌著『釈尊の呼吸法―大安般守意經に学ぶ』)

大気に存する酸素と地球上に存する人類の酸素消費量の関係を命題にしたエヴェレスト・マラソンは、人類と酸素の存在の関係をマクロの次元で考え、その存在理念を考え合わせた行為であって、イギリスの医師らが20世紀末から今世紀への地球上での人類のあり方を、とくに呼吸という人間共通の課題の中で考えようという社会的行為である。

こんなたとえは通用しないというが、人口増に対して、私たちはいかに生きることが許されるのだろうか。途上国の諸問題に対して

21世紀の初頭のテロ事件も、原点がここにあるとなると、炭酸ガスの排出規制も肯定できる。

■酸欠下での高所訓練の効果

高所登山においてはとくに、酸素ボンベを携えての常時酸素補給が呼吸援助の手段として行われている。がこれとて今日の登山技術における順応トレーニング(荷上げ、ルート工作、偵察などなど)で、8000mを越す高峰でも、酸素なしで登頂している登山者の事例はいくつもある。もはや訓練の問題である。



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここが得意です。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。



株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

また持久性を必要とするスポーツ競技のトレイニングは、低圧・低酸素下である高所(2300、2500^{ft})、準高所(USACコロラド・ボルダー・1600^{ft})、中国雲南省昆明・1886^{ft})でのトレイニングの有効性が実証できている。一定期間(3、4週間)トレイニングをすることが競技力を向上させるのに常識化してきている。

1960年ローマオリンピックでのエチオピアのアベベの馬拉ソンの優勝、1968年メキシコ大会(メキシコシティの標高は2240^{ft})と前後して、高所トレイニングが注目され、高所トレイニング環境システム研究会(東大身体運動科学部小林研究所)での人工気候空間、低圧実験、低酸素吸入がいくたの実績の基となり、今日では信越線碓氷峠に高所トレイニング場が準備されている。他にも乗鞍岳など、いくつかあげることができる。

要は呼吸における最大酸素摂取量、最大換気量、呼吸の量の変化血中純酸濃度、動脈血酸素飽和度などの比較測定による、低酸素下での訓練である。

有森裕子のアトランタ、高橋尚子のシドニー、いずれもこれらの訓練結果であり、酸欠下での訓練が功を奏している。山を登り続けている者は、さほどの高所でもなくともその成果は高いし、持続性は2、3年になるであろう。高所に滞在し、低地で走り抜く訓練が定石である。

人間が生き、大気が存在する社会において、人間行動がとる業務量を知識情報量が超え、人間間の関係量としての組織量に存在価値を見出さないわけにいかない。

ゴミの護美のこと

上野 幸人

ゴミのことで、ある講演会で質問されたことを思い出す。

「あなた方は、遠征隊で使ったものはどうしましたか? 使用したロープは回収しなかったのですか?」

答えは「持って帰れるものではなく、最大だけ持って帰り、残ったものは燃やしたりして、氷河の中に埋めてきました。ロープについては他の隊も使用しており、回収は考

えませんでした。私たちが最後であつても、回収は不可能です」と答えた。

ゴミ(護美)とはなんだろう。環境を守るとはなんだろう。

日本の山々では、奥地まで道路を作り、山小屋を作り、ゴミや排泄物を1カ所に集め、どこかへ持って行く。たくさんの人たちは整備された道路と山小屋を利用し、自然とふれあう。

ヒマラヤの山々もだんだんそうなつてきている。たくさん人のトレッカーのためにロッジができ、トイレも常設されるようになってきている。そこに住む人たちにとっては格好の現金収入となり、地域の活性化となつていく。訪れる人びとは数万人単位である。

しかし、私たちの行っている登山はこのようにはいかない。人里離れた地域でテントを張り、1カ月以上滞在して登山活動をしなければならぬ。一般化された地域と違い、年に5、10隊程度の登山隊しか入山許可にならず、人数も200人に満たない。

ゴミの処理も私たちだけでしなければならぬ。できるだけ持ち帰るようにしても、たくさんのも

のが残ってしまう。とくに排泄物についてはどうしようもない。

私たちのしていることは環境破壊なのだろうか。私たちの行為は冒険的行為と言つてみても、誰も理解してくれない。止めればことは簡単である。悩む必要はない。しかし、登山を止めることはできない。

道ができ、山小屋もできてたくさん人間が入り込めようとなつてくると、環境保全を考えると納得がいかない。生き物たちの生態系を考えると、先進国といわれる国の人たちは、自分たちの都合のいいように開発してきている。自分たちに不便であれば「誰も自然とふれあうために」という名目で開発してしまう。見た目に汚いものは覆い隠してしまい、不必要なものはゴミとして限りなく放出する。

人間の見た目できれいにしていればよしとし、汚く見えれば悪しとしていく。見る人間の価値基準で変わっていく。見る人間の地域差によつても大きく変わってくる。

しかしそこに住む生命は、与えられた環境の中で生きている。人間の価値基準によつて生かされて

Climbing & Medicine・9

凍傷の保存的治療

長尾 悌夫

某大学山岳部員が春山で足指の凍傷にかかり、帰京後診察を受けた病院で直ちに切断と言われ、監督に勧められて来院した。

右第2、左第2・第3の足指の先端が第4度の凍傷であり、切断もやむなしという状態であった。しかし、罹患部位が指先部だったので、保存的にやれるかとも考え、切断と保存的治療の利害得失を説明し、時間はかかるが保存的にやろうと説得した。

不潔になりやすい足指であり、細菌感染防止と循環状態改善のため、自宅で毎日薬液を混ぜた温湯による足浴を励行させた。患部は感染の徴候もなく、理想的な乾性壊死となり、罹患後2カ月でちょうどドングリの総苞が落ちるように壊死部が脱落し、あとに爪も生えかけているきれいな指先が現れた。指長の短

縮も最少限ですみ、本人は満足してその年の夏山合宿にも参加した。

第4度の凍傷では、通常部分的にせよ切断は避けられないが、手術は決して急いではいけない。壊死部の分界線が完成するまで4週間は待つべきである。指先部だけの罹患であれば、自然脱落を待ってもよい。凍傷治療すべてに言えることだが、局所を乾性壊死にすることが大切で、そのために軟膏類は一切塗布してはならず、患部は薬浴などで清潔に保ち、軽く包帯をする程度でよい。

自然脱落まで今回は2カ月と早かったが、通常は3カ月くらいはかかる。脱落のあとは外科的な処置は不要である。

凍傷は何よりも予防が第一であるが、罹患してしまったときは、現場では40~42℃の温湯による急速融解を行い、再凍結を防ぎながら下山して、医師による治療を受けることになる。部位によっては保存的治療という選択肢もあるので、外科医なら誰でもよいというわけではなく、凍傷治療の経験のある医師に相談すべきである。

いるのではない。生命はさまざまな生態系に影響されながら、共に生きている。私たちは何をすべきだろう。「知恵」ある人間は何をすべきなのだろうか。

世界中で行われている戦争。豊かさを求めるための開発。物質的豊かさのみを追求し、見た目の清潔さ、快適さにとらわれて、他の命を脅かしている。破壊される森と大地。やがて、私たち自身にそのつけが回ってきて、社会問題となる。環境保全、ゴミの処理と騒がれてきている。それも、人間の都合のいいようにである。そして、その中で私たちの登山も批判される。

私たちの登山は、登るためにそこに半永久的な道を作ったり、山小屋を望んだりしてはいない。与えられた環境の中で、最小限の行為によって登らせてもらっている。そして、人間の中にある他の生物とはちがう欲求を満たすために、争うことなく他を破壊することなく、未知への探求心と自分自身の可能性を追求するために、登らせてもらう。都合のいい理屈になつてしまいが、登山を止めることはできない。

その上で考えよう。地球という大きな生命体を守るためにはどうしたらよいのか。これからも増え続ける人口。追い求めてしまう物質的欲求。もつと関心を持つとう、地球全体のことを。どうしたらよいのか考えて、一人ひとりの暮らしの中で実践していこうと思う。私たち日本人は、もつと他の世界の暮らしを知るべきだと思う。そして、世界で最も豊かな国なのに、なぜ豊かさを実感できないのだろうか。何を求めているのだろうか。何が幸せだと思っているのかを知るべきである。

ワインを直輸入しています

主にフランスはブルゴーニュのワインを中心に輸入しています。こだわりの無名ドメースを発掘!! 今、ワイン界に新風を送っています。SO2の少ないピュアなおいしいワインを、毎年フランスに行きドメースから直接買いつけています。素晴らしいおいしさです。ぜひお試しください。全国発送いたします。ホームページをご覧ください。
<http://www.winedou.co.jp/>
トップコンテンツのマキノレポートは山とワインのレポートです。メールマガジンもよろしく。

マキノ酒店有限会社 牧野 菊生
(会員8299番)

千葉県印旛郡富里町日吉台5-10-7
TEL: 0476-93-2200
FAX: 0476-93-7548

●日本ソムリエ協会関東支部ワインアドバイザーコンクール入賞 ●フランス食品振興協会(ソベクサ)認定コンセイエ(小売店のソムリエ) ●ワイン総合研究所公認名産ワインマスター

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

ゴドラ・カスライマン・写真 『コー・ホイ・エ・イラン (Mountains of Iran)』

イランの山と言えばデマベントぐらいしか知らない、というのが平均的な私たちの認識だろう。最近とかく話題にのぼるアフガニスタン、宗教も地形も似たその西隣の国から、山岳写真集が発行され、図書室に寄贈されているので紹介しておこう。

328×247ミリの大判に紹介された山々を見ると、夏でも豊富な残雪を誇り、砂漠の国をイメージしている者には意外の感がするだろう。

最初に4000(2000)級

の主な30山とその地域が紹介されているのも、この国の山の概要を知る上で便利だ。写真からは山容だけでなく、登山者の姿や装備、集団登山の様子などがうかがえ、興味深い。

表題と説明はペルシャ語であるが、英文も添えられている。なお発行年はイスラム暦。昨年イラン山岳会から寄贈されていたが、筆者の怠慢で紹介が遅れたことをお詫びします。(泉 久恵)

1349(西暦1998)年
セッカー印刷発行 128ページ
2000リアル

青山学院大学体育会山岳部・同OB会編

『山靴の跡』

青山学院大学体育会山岳部
七十五年史

手書きの正誤表がコピーされて貼りつけられていて、およそ70項目の正誤表そのものの誤りに訂正がどここされている。このリストに洩れている誤植を私は少なからず見つけた。市販の書籍であったら大きな欠点となるはずだが、この75年史の場合、専門の校訂者の力を借りずに作られた書物らしい、

愛すべき性質をあらわすもののよいに見える。

大正の末期(1925年)、大学山岳部誕生の時流を追いかけて誕生した青山学院大学山岳部は、他大学の山岳部と張り合って初登攀を競った。日本山岳会の初代会長だった小島烏水の子息である小島隼太郎が部員であって、この人の主義主張が記録されている。日本山岳会の第二世代の登山意識を考察するのに役立つだろう。

本書のもっとも興味深い点は、1952年に最初の女子部員を迎え入れたことで、断続的に男女混合の山岳部であり続けたし、1999年の卒業生3人すべてが女性だった。創部こそ多くの大学の後塵を拝したが、男女混合の大学山岳部としては立派に先頭グループに属していた。

大学山岳部を一望のもとに見晴らす歴史を編もうとする者にとつて、貴重な文献となるにちがいないこの本の誕生を、私は率直に祝いたいと思う。

新聞・雑誌などのメディアによって紹介される機会がないと思われるこのような出版物を紹介できることこそ『山』の本欄の存在意義である、と私は信じる。

(宮下啓三)

2001年3月 青山学院大学
体育会山岳部・同OB会発行
328ページ 非売品

大町山岳博物館・編

『新・北アルプス博物誌』

大町山岳博物館創立50周年記念として、『新・北アルプス博物誌』が出版された。当館の機関誌『山と博物館』の創刊から現在に至る680号あまりの掲載文の中から「山・人・博物館」というキーワードによって話題を選び、加筆したほか、新たに書き下ろした文を加えて編集されている。

『山と博物館』は昭和31年2月に創刊。現在まで欠くことなく、毎月発行されている。その間、分野の専門家、登山家が寄稿し、北アルプスの山岳自然・歴史などの「山岳文化」と博物館活動について広く情報発信を続けてきた。こうして積み重ねられてきた「博物館の財産」ともいえる貴重な情報がこの一冊に集約されているのである。

大町山岳博物館は、昭和26年11

月開設され、開館から半世紀を経た現在、時代の移り変わりとともに、その果たすべき役割を改めて問われているとし、第1章・山―北アルプスの自然、第2章・山―北アルプスの歴史、第3章・博物館―自然保護の活動、にまとめられ、これまで蓄積してきた山岳文化の歴史の深さと重みを遺憾なく披瀝してくれている。

博物館渾身の力作である。

(村井 葵)

2001年10月 信濃毎日新聞
社発行 401ページ 300
0円

近藤等・著

『アルプスの蒼い空に』上・下

60年代や70年代に読んだ、近藤さんのレビューファやボナッティの翻訳本は、私や同世代のクライマーたちにとって、偉大な目標であり憧憬であったのだが、その対象は、あくまで本に登場するヒーローたちで、訳者の近藤さんの存在は、あたかも黒衣のように隠れていた。

しかし、この本を読んでみると近藤さんはレビューファやボナッテ

イの作曲した曲を演奏する偉大な指揮者のような存在で、私たちはその曲に聞き惚れている聴衆だったかもしれない、と思ってしまう。

近藤さんの一連の訳業が、60年代以降の日本の登山界に新しい方向性を示す大きな役割を果たしたことは疑いない。だが近藤さんは翻訳家としての黒い衣装をまといつ

つ、その一方で、アルピニストとしての長い戦いを40歳を過ぎてから深く静かに開始する。

アルプスに出かけたほとんどの日本人が、三大北壁などの一部の著名ルートや、マッターホルン、モンブランの登頂で満足しているのに比べ、アルピニストの近藤さんは、ダンディーでスマートな外見からは想像できないほど、欲が深い。

アルプスの名峰、名ルートをことごとく登り尽くしたともいえる150回にもおよぶ山行。その中から選ばれた珠玉の登山記録には、ガストン・レビューファ、アンドレ・コンタミヌ、ルネ・デメゾンといったフランス登山界の英雄たちや、中野融さんを筆頭とする日本人アルピニストの強者たちが、近藤さんのザイル仲間として次々

に登場し、近藤さんの洗練された登山スタイルと共に、数々のクライミングシーンを豊かに彩る。

近藤さんの登山観やアルプスに注ぐ愛情は、この本の冒頭のエッセイ「アルプスの蒼い空に」に凝縮されているのだが、自分の愛する登山に実践と文筆の両面にわたって、これほど深い情熱を注いだ日本人を私は知らない。改めて、近藤等さんのクライミングと見事な生き方に、心から敬意を表したいと思う。

(坂下 直枝)

2001年11月 茗溪堂発行
上巻277ページ 下巻293
ページ 各5000円

船木上総・著

『凍る体―低体温症の恐怖』

「震えているときに眠気が出たら要注意」とあとがきに書いてある。本書は低体温症からみごとに蘇った体験談と、低体温症の解説である。

著者は医学生の際にモンブランをスキーで下降中、ヒドンクレバスに落下した。16時間後に救出された時の体温は28度、しかも意識混濁。体は凍って黒くなっていた。

シャモニーの救急隊と病院の速やかな処置で、一命を取り留める。医療関係者と本人の努力で、多少の後遺症を残しながらも、念願の内科医になった。しかも自分の経験を活かして、リハビリ者向けの病院を開設して地域医療に貢献している。

第1部「クレバスへの落下」では、ヒドンクレバスの恐ろしさ、救出作業、蘇生方法、そしてリハビリや劣化した記憶力で国家試験に挑む姿などが描かれている。周囲の根気ある温かい励ましとともに、際限のないリハビリに立ち向

地球のてっぺんに立つ感動の旅

世界で唯一のチャーター企画。壮大なる夢が実現

北極点への船旅

2002年8月19日(月)～9月3日(火) 16日間

●募集人数99人限定 ●169万円～219万円

ALPINE SERVICE 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F TEL.03-3503-1911
大阪/TEL.06-6444-3033 名古屋/TEL.052-581-3211 福岡/TEL.092-715-1557

かう心の葛藤。健常者のなにげないひと言が、この上なき励ましになったり、時には患者を傷つけることもあると、改めて認識させられた。

救出後からの医学的データを適度に織りまぜながら、素人目にもわかりやすく書かれており、興味を持って読み進むことができる。

第2部「低体温症」では体温調節のメカニズム、低体温症の症状、原因と予防、山での症例、山での治療の5項目からなり、多くの症例と処置、注意点など基礎知識が詳しく解説されている。

夏山でも起こる低体温症、是非読んでおきたい本である。

2002年2月 山と溪谷社発行
204ページ 1400円
(南井 英弘)

東野 良・著

『ヒマラヤ・チベット縦横無尽』

NHKの報道カメラマンの頂点に立つエグゼクティブカメラマンが語る、ヒマラヤ・チベットの取材奮戦記である。

著者は1984年から広大なヒマラヤ・チベットに、延べ20回テ

レビドキュメンタリー番組の取材に入り、ナムチャバルワやチョモランマなど5本の登山番組をはじめ、地域の自然の素晴らしさや、そこに住む人びとの暮らしを紹介する「聖山カイルス巡礼」、「地球大紀行」、「ヒマラヤトレッキング紀行」など数々のスペシャル番組の映像を、カメラに収めた。

中でも、圧巻は高所登山の同行撮影である。7000〜8000mの高所での行動は、極限に近く厳しい。生と死のはさまにあって、重さ10kgのカメラを駆使する息遣いは荒い。

これらの番組の企画や取材にあたっては、本会や本会会員の協力が大きな役割を果たしている。

本書は八つの山域の企画取材記にしほられ、本会会員の山森欣一、重広恒夫、田部井淳子ら諸氏の名前が見える。

山をあまり知らなかった著者が40歳を過ぎて、第一級の山岳カメラマンに変身する経緯も面白い。著者は現在、NHK仙台局勤務で、本会の宮城支部会員である。

2002年1月 平凡社発行
293ページ 1700円
(川合 周)

図書受入報告 (2002年2〜3月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
根深誠	白神山地・四季のかがやき：世界遺産のブナ原生林	159pp/21cm	JTB出版事業局	2002	出版社寄贈
岳人編集部(編)	山のメモ帖(すぐ役立つシリーズ)	211pp/19cm	東京新聞出版局	2002	出版社寄贈
金澤康夫	住友の山と人	113pp/21cm	日本山書の会	2002	著者寄贈
Deutsche Himalaya(ed.)	Nanga Parbat : Berg der Kameraden	184pp/22cm	Roth&Co.	1939	W.Heichel氏寄贈
D.M.Satulowski	In Firn und Fels der Siebentausender	481pp/20cm	VEB F.A.Brockhaus	1963	W.Heichel氏寄贈
N.M.Prshewalski	Hanhai-Von Kuldsha uber den Tianschan und zum Lob-nor	248pp/22cm	B.I.Volkseigener	1952	W.Heichel氏寄贈
Hans Hartmann	Ziel Nanga Parbat	96pp/21cm	Wilhelm Limpert	1943	W.Heichel氏寄贈
N.W.Preshewalski	In das Land der Wilden Kamele	339pp/22cm	VEB F.A.Brockhaus	1954	W.Heichel氏寄贈
Peter Mierau	Die Deutsche Himalaja-Stiftung	248pp/21cm	Bergverlag Rother	1999	W.Heichel氏寄贈
米山孝志	日本百名山・えちご駒ヶ岳：山小屋つれづれ日記	88pp/20cm	コマガタ	1997	著者寄贈
軍司秀峰	鳥海山への招待：軍司秀峰写真集	205pp/22cm	SPOONの本	2002	著者寄贈
滑志田隆	風だより山形路：現代やまがた側面記[第3刷]	236pp/21cm	阿古耶書房	2002	著者寄贈
オデッセイ・エベレスト登山隊2001(編)	それぞれのエベレスト：Odyssey Everest Expedition 2001	248pp/21cm	オデッセイ・エベレスト登山隊2001	2002	発行者寄贈
川田哲二	エベレスト61歳の青春	273pp/22cm	ナカニシヤ出版	2002	著者寄贈
慶佐次盛一	北摂の山：西部編	265pp/20cm	ナカニシヤ出版	2002	出版社寄贈
井手孫六	荒川新発見	167pp/21cm	東京新聞出版局	2002	出版社寄贈
鈴木欣司	首都圏野生の紳士録	143pp/22cm	東京新聞出版局	2002	出版社寄贈
世界岳都都市会議(編)	2001世界岳都都市会議REPORT(2001年10月7日〜9日)	128pp/30cm	2001世界岳都都市会議	2002	発行者寄贈
佐々木民秀(編)	韓国漢拏山・俗離山親善登山報告書(2000.6/4〜6/10)	55pp/26cm	日本山岳会秋田支部	2001	発行者寄贈
安藤忠夫	奥美濃がたり	416pp/22cm	安藤忠夫(私家版)	2002	著者寄贈
JWAF(瀬戸内天山カシカル峰登山隊)(編)	天山山脈科其喀余尔(カシカル)峰初登頂の記	82pp/26cm	JWAF(瀬戸内天山カシカル峰登山隊)	1994	発行者寄贈
出利業義次(編)	遥かなるチベット クーラカンリ：中央峰・東峰初登頂の記録	191pp/30cm	東海大ヒマラヤ遠征委員会	2002	発行者寄贈
深田久弥	百名山ふたたび(百名山紀行シリーズ No. 1)	233pp/22cm	河出書房新社	2000	出版社寄贈
深田久弥	一日二日の百名山(百名山紀行シリーズ No. 2)	226pp/22cm	河出書房新社	2000	出版社寄贈
深田久弥	日本アルプス百名山紀行(百名山紀行シリーズ No. 3)	230pp/22cm	河出書房新社	2000	出版社寄贈
田澤拓也	百名山の人 深田久弥伝	313pp/20cm	TBSブリタニカ	2002	著者寄贈
索文清(編)	チベット研究文献目録(中文・日文)1945-1999	278pp/22cm	風響社	1999	購入
田部井淳子	花、木、自然に会いに はじめての山歩き	197pp/19cm	文化出版局	2002	出版社寄贈
デジタルビジョン(編)	遙かなるセルカーク：南嶺会創立70周年記念カナディアン・ロッキー登山隊報告書	22pp/26cm	南嶺会	2002	発行者寄贈

田澤拓也・著

『百名山の人―深田久弥伝』

今、空前の日本百名山ブームである。この日本百名山ブームによって深田久弥の名は不朽のものになり、登山者の間ではほとんど神格化されつつある。

しかし、本書の筆者はこの多くの登山者をもつ深田久弥のイメージとは別に、彼の日常生活、彼の内面からその実像に迫ろうとしたものである。

『日本百名山』がいかにして生まれたか、その影には今まで公にできなかった「葛藤」があった。

北畠八穂と始まる作家としての二人三脚そして確執、山への情熱、さらに初恋の人、志げ子夫人との再会。これらにふれることは暗黙のタブーですらあった。しかし開高健賞に輝くこのノンフィクション作家は、タブーに勇敢に挑み、短期間のうちに膨大な資料をこなし、多くの関係者に精力的に取材し、見事に深田久弥の生涯、人間としての実像を描き出すのに成功している。

読者によっては深田久弥の私生活にまず幻滅を感じるかもしれない

いが、読み進むにつれて『日本百名山』に至るまでの深田久弥の本当の偉大さに感銘を覚えるだろう。ただし、あとがきにある通り、筆者は「日本一名山」のひとと自称しているだけに、登山は素人のよう

うだ。それだけに本会の副会長まで務めた登山家としての実績にも、もう少しふれて欲しかったと思う。がしかし、人を惹きつけてやまない筆力は、さすがにプロ作家であると思う。深田久弥研究の上では、必読の名著であると言えよう。

(小倉 厚)

2002年3月 TBSブリタニカ発行 314ページ 1600円

『BERG 2002』

Alpenvereinsjahrbuch Band 126

ドイツ、オーストリア、南チロル各山岳会の合同年報。旧独逸山岳会の年報Zeitschriftが変身したもので、後者の通しナンバーでいえば第126号になる。造本をはじめ変身ぶりは著しく、まず目につくのはビジュアルでカラフルなこと。

内容も登山界の現状を反映して、

わが「山岳」と同じく「古典的」な登山情報はきわめて少ない、というが皆無と言つてよい。最終章の1999/2000年の登山クロニクスの題はなんと「無駄な行為(あるいは無用者)の記録」。田部井淳子さんのポベータと並んで、1924年のマロリーとアーヴィンとまったく同じ衣服と装備でエヴェレストに挑んだ(登頂できず)スベインの二人の登山家の記録も載っている。

例年の付録地図特集はホーホケーニツヒ・ハーゲン山塊。その解説の題は「欧州最古の先史時代の

工業中心地」。このあたりで昔から大量の銅が採れたからだが、こ

とほどこように主要な記事のテーマは、ほとんど歴史、民俗、地誌、科学、美術、文学で占められている。

総じて最近の「BERG」には遊び感覚が横溢していて、アウトドアに対する目配りも広く、マウンテンバイクやカヌーの旅もどんどん取り上げる。

(平井 吉夫)

「山の本」春の新刊発売!!

エベレスト 61歳の青春

川田哲二 著 A5判 280頁 本体2,400円

1970年、8千米峰の中で最難といわれたダウラギリ第2登に成功した著者が、61歳で憧れのエベレストに挑む。

御嶽の風に吹かれて―開田高原への招待―

久山喜久雄 著 四六判 180頁 本体1,900円

木曾御嶽の東麓、雄大な自然と文化の脈打つ開田高原に暮らす人々の姿と四季の移ろいを綴る。

葛城の峰と修験の道 (2002年5月刊行予定)

中野栄治 著 A5判 304頁 予価 2,800円

友ヶ島の序品廬から大和川の亀瀬までの葛城28品の峰と経塚を辿り、修験道史料を実地検証した山岳信仰の研究書。

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入 385ページ+B全判地図13葉

宮森常雄・雁部貞夫 共著

◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2

Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665

URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

会務報告

3月理事会

日時 3月13日(水)18時30分

～20時45分

場所 日本山岳会会議室

「出席者」大塚会長、芳賀、長尾、村井各副会長、西村、今村、坂井、高原、朴元、藤本、宮下、松原、鈴木、黒川、大野、河西、小川各理事、古市、内田各監事、平林、宇田川、宮崎、鯉坂各常任評議員「委任」高遠、中村、鳥居各理事

【審議事項】

1 平成14年度事業計画(案)および収支予算(案)について

(西村・村井副会長)

別添資料により提案、詳細に検討された結果一部追加、改正があり承認された。併せて、本案件議事録の文部科学省提出にあたり、その署名人を今村千秋、高原三平の両理事とする。(承認)

2 細則改正について(その4)

(西村)

役員改選についての経緯は、平成13年9・10・11月度理事会で継続審議、11月評議員会、12月支部長会議で中間報告、8回にわたる

会長・副会長経験者、評議員らの有識者からの意見をふまえたものである。

●改正案(傍線部が改正箇所)

《改正後》

第7条 定款第14条による理事の選挙は、理事会があらかじめ評議員会の意見を聞いた上で、その候補者を推薦するものとする。

第8条(据え置き)

《現行》

第7条 定款第14条による理事および監事の選挙は、その候補者を評議員会が推薦するものとする。

第8条 定款第14条による会長および副会長の選挙は、その候補者を評議員会が推薦するものとする。

●改正理由

第7条は、従来の慣行通りでスムーズに運んでいる。条文を慣行に合わせた。

第8条は、細則改正を検討したが、会長・副会長候補者推薦の具体的手続きを明確化する改善を行うことで、今回据え置く。

●その他

改正条文を補足する次の事項を確認。

【候補者推薦の手続き】

(1)会長・副会長

会長・副会長を含めた常務理事会が、常任評議員、会長経験者、前副会長の意見を求め、次期候補者の素案を作成する。会長・副会長の候補者を評議員会が総会に推薦する。

(2)理事

常務理事会が常任評議員を加えて、会長・副会長の意向と委員会担当理事の意見とを集約して、次期候補者の素案を作成。それを理事会に諮り、理事会が理事の候補者を、あらかじめ評議員会の意見を聞いた上で、総会に推薦する。

「候補者推薦の手続き」は、会報「山」の理事会議事録にも掲載。

(承認)

【報告事項】

1 「2002国際山岳年」の企画について (西村・高遠代理)

国際山岳年日本委員会主催の行事が別添資料により報告された。

◇フォーラム「我ら皆、山の民―私たちは、なぜ山にひかれるのか」4月7日(日)10時より17時まで東京・ウィメンズ・プラザ・ホールにて

◇シンポジウム「日本の山をとりもどす・環境破壊と活性化」

(主催、日本地理学会、日本大学文理学部地理学科、国際山岳年日本委員会)

4月14日(日)10時より17時30分まで日本大学文理学部にて

◇富士山エコ・フォーラム「初めての山登り―富士の自然を君たちへ」

7月6日(土)～7日(日)富士山(富士吉田市、富士宮市)にて

2 行事などの参加報告

(芳賀副会長)

平成14年2月16日開催の日本勤労者山岳連盟総会へ出席した。新会長に守屋益男氏が就任。

3 資料使用、名義後援許可願について (西村)

以下の依頼に対して許可した。

①加賀市より「深田久弥生誕100年記念事業(平成15年開催)」へ協賛・名義後援およびチラシの同封

②池田町立美術館(長野県)より

「茨木猪之吉展」(平成14年10月5日～12月8日)への作品貸出し(貸出し期間は3月7日～12月17日)

③長野朝日放送より「JA発信州

の自然とロマンシリーズ4 北アルプス山麓に生きる」(2月23日放映)で、ウエストンの肖像の写っている絵葉書1点の使用

④読売新聞社より「山のスケッチ展」への名義後援と作品の出展

4 日印合同東カラコルム踏査・パドマナブ登山隊 (坂井)

隊長にハリシユ・カパディア氏、副隊長兼登山隊長に坂井がたつ。現在最終計画書を作成中。まだインド政府より正式許可書は来っていない。

5 各委員会報告

財務委員会・高原

全国支部事務局担当者会議を2月23、24日、全支部より27名の出席のもと開催した。初日は江本嘉伸氏の講演「国際山岳年と日本の山」に続き、シンポジウム「支部活動を考える」。2日目は事務連絡、支部運営の問題点などの質疑応答、交流を図った。

財務委員会・村井副会長、内田、古市各監事

①4月より2月末まで累計の会計報告(会費未納者リストの提示、支払い協力依頼があった。

②平成13年度の収支予定(2月末における)報告。予定を超える入金があった場合、長期計画準備積立金に繰り入れることで承認依頼があり、理事会として承諾した。

③ペイオフ対策の一環として、財務委員会で行った特定預金の定期預金明細一覧(預金先を示したもの)が報告された。

④通常監査および世界岳都市会議特別企画展(資料委員会)、高尾の森(自然保護委員会)の収支について個別監査を3月6日に実施、特に問題のなかった旨の報告が内田、古市両監事よりあった。

財務委員会・図書管理小委員会・村井副会長

別紙により20000(2001年度の図書室納本数(雑誌は除く)についての報告があった。(2年間の総数は525冊、うち購入したのは15冊)

会報編集委員会・今村

3月号は「創立100周年企画について」を特集。

海外委員会・西村(中村代理)

在日ネパール王国大使館より別添に示す通り、60峰について今年より向こう3年間、登山料を75%減額、ないしは廃止するとの通知があった。併せて関係者への通知の依頼もあった。

自然保護委員会・河西

①高尾の森植樹祭を4月14日に行う案内があった。

②「高尾の森」通信5号刊行。

青年部委員会・松原

「きりぎりす」5号刊行の案内。

6 その他

①東海支部の活動について(西村) 知的障害者登山をアシストした話が、中日新聞に大きく取り上げられた(全国支部事務局担当者会議より)。

②山本正嘉氏の秩父宮記念山岳賞授賞記念パーティー報告(藤本)

2月17日、芝弥生会館において80名の出席を得て盛大に開催された。

■会員異動

物故

岡建 治郎(6917)02・3・5

田中 三郎(9598)02・3・21

退会

山崎 英雄(4038) 北海道

式 正英(5124)

川村 旭(6028) 静岡

中川 泰助(6392) 北海道

中山 昇二(6519)

岡本 英治(6709) 関西

金澤 常夫(6795) 越後

村上 泰賢(6998)

秋山 平三(7305)

山倉 洋一(7481) 福島

山家 安保(8643)

三谷 忠男(8936)

中村 恵二(8981) 熊本

真田 匡三(9177) 山形

平野 紀子(9568)

本道 重徳(9747) 信濃

奥山 善一(9794)

本城 武(9812) 宮崎

西村 章(9847) 京都

紫沼 武子(10267)

斎藤 慶子(10379) 山形

本庄 眞(10531) 関西

伊藤 裕泰(10696)

岸 明(10958) 岐阜

横山 利三(11124)

内田 充子(11147) 信濃

山崎 勉(11304)

石塚 文行(11372)

小島 吉二(11393)

藤井 怜二(11405)

福山 眞(11495) 東海

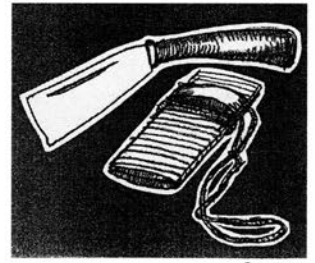
石井 文雄(11745)

新井 孝(12825) 北海道

安藤 京子(13036) 宮崎

稲田 優(13429) 福岡

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆第56回ウエストン祭

信濃支部

今年は陽気が進んでおり、この記事がお目にとまる頃は徳本峠も雪がほとんどなくなっているかもしれない。しかし初夏の上高地の素晴らしさはいつもと変わりにく、皆さんをお迎えすることでしょう。恒例の第56回ウエストン祭には、斎藤前会長をお迎えして、ウエストン碑前祭で記念講演をしていただく予定になっています。

◇6月1日(土) 徳本峠越え(雨天中止)

集合 安曇村島々宿徳本峠入口
受付 5時 出発6時

◇6月2日(日) 碑前祭

場所 上高地ウエストン広場
式典 10時

記念講演 10時50分

講師 斎藤惇生氏

問合せ 百瀬寿雄 (TEL・FAX 026

3・33・3645) 中野

和郎 (TEL・FAX 0263・7

2・3345) eメール

ygenta@mx2.avis.ne.jp

◆第25回裏妙義中間道山行

つくも会

日時 6月2日(日)

集合 信越線松井田駅改札9時50

分(高崎線上野7時16分発

—高崎着9時8分・9時17

分横川行きに乗り換え松井

田着9時40分)

行程 松井田駅—タクシーで石門

入り口(50分)—第4石門

(2時間10分)—妙義神社

(バス40分)—上州富岡駅—

高崎駅(解散)

*時間があれば妙義神社近くの

「妙義ふれあいプラザもみじの湯」

で汗を流す予定です。

装備 無積雪期装備

食糧 昼食・行動食

地図 2万5千図 松井田・南軽

井沢

申込 5月26日までに氏名・会員

番号を明記の上ハガキか電

話で吉澤平治宛(〒214

・0034 川崎市多摩区

三田3・1・2・5・30

1 TEL・FAX 044・933

・5895)

その他 第1石門から第4石門ま

で鎖場が連続します。

問合せ 吉澤平治(携帯090・

4929・1517) 渡辺泰則(携

帯090・7273・0764)

◆「山岳写真セミナー」開催

フィルムビデオ委員会

いよいよ夏の季節、素晴らしい山の写真を撮ってみませんか。

撮影のノウハウと作品作りのワン

ポイントを学ぶセミナーです。初

心者大歓迎!

日時 6月13日(木) 午後7時

会場 山岳会集会所

会費 資料代500円

講師 フィルムビデオ委員会

◇スライド上映による解説。講評

もします。希望者は35mm判ポジ

フィルム(スライド)かキャビ

ネサイズ(11判)相当のプリ

ント5枚程度お持ちください。

◇申込みは当日。ただし会場の都

合上、30名で締め切ります。

◆裏岩手縦走 96同期会

日時 7月6日(土)・7日(日)

山名 三ツ石山、大深岳、源太ヶ

岳縦走

行程 JR盛岡駅(バス)—松川

温泉—三ツ石山荘(泊)—

三ツ石山—大深岳—源太ヶ

岳—松川温泉(バス)—J

R盛岡駅

*三ツ石山荘は管理人なし、シェ

ラフ持参

申込 6月30日までに電話で遠山

宛(遠山元信 TEL 048・

771・0053・及川迪

靖 TEL 019・638・6

393)

◆5周年記念山行 97同期会

会の発足5周年を記念し、上高

地「山研」集中登山および懇親会

を計画しました。

期日 9月7日(土)〜9日(月)

行程 ①徳本峠コース(6日夜行

発) 島々—徳本峠小屋(泊)

—上高地

②蝶ヶ岳コース(7日朝

発) 豊科—蝶ヶ岳ヒュッテ

(泊)—上高地

③奥穂高岳コース 新穂高

温泉—穂高岳山荘(泊)—

前穂—上高地

④「山研」直行の場合は8

日(日)14時に山研集合、懇親

会と宿泊

会費 9千円(宿泊懇親会費用)

申込 6月末までに会費振込にて

受付、通信欄に希望コース
記入、郵便振込で(10080
80329081 JAC97同期会
代表者 増田幸雄 〒15
4-0002 世田谷区下
馬4-15-8)
問合せ 池谷健 (TEL 042-36
6-2485)
eメール ken1009@d7.
tion.ne.jp

◆**山本茂富個展「四季」**
日本の四季を彩る風物を、油彩・
水彩で表現。
日時 5月28日(火)〜6月2日(日)
11時から19時 (最終日は18
時30分まで)
場所 竹川画廊
中央区銀座7-7-7 TEL
03-3571-0320
問合せ 山本茂富 (TEL 049-2
59-6708)
http://www.h3.dion.ne
.jp/~tabibito/

◆**山里寿男個展「空翔ける旅」**
―山なみ巡礼・古塔陰翳―
日時 6月16日(日)〜22日(土)
11時から19時 (最終日は17
時まで)
会場 ギャラリー ムサシ
中央区銀座1-9-1 TEL

03-3564-6348
問合せ 山里寿男 (TEL 0261-
72-5357)

◆**2002年日本山岳画協会展**
山を愛し、描き続ける洋画家16
名による、山を主題とした作品約
35点を展示します。
日時 7月1日(月)〜7日(日)
11時から18時30分 (最終日
は17時まで)
会場 朝日アートギャラリー
中央区銀座4-10-1 TEL
03-3567-1671
問合せ 牧潤一 (TEL 049-26
4-7369)
*入場無料

ルーム日誌

3月 高所登山研究委員会 会報
2日 編集委員会
4日 総務委員会 自然保護委員
会
5日 自然保護委員会 集会委員
会 アルパインスケッチク
ラブ
6日 財務委員会 山岳地理クラ
ブ 山の自然学研究会
7日 アルパインフォトクラブ

97同期会
11日 常務理事会 アルパインス
キークラブ
12日 二火会 アルパインスケッ
チクラブ
13日 理事会 つくも会 休山会
14日 科学委員会 学生部 山の
自然学研究会
16日 サン燦会
18日 図書委員会 資料委員会学
生部
19日 百年史委員会 フィルムピ
デオ委員会 00会
20日 山研運営委員会 インター
ネット小委員会 長期改善
計画策定プロジェクト 三
水会
23日 評議員会
25日 高尾の森づくりの会
26日 自然保護委員会 集会委員
会 95同期会
27日 学生部
28日 青年部 96同期会 98同期
会 アルパインスキークラ
ブ 3月来室者608人

■訂正 4月(683)号8ペー
ジ4段30行、執筆者の名前関口貞
亨は関塚貞亨氏の誤りでした。お
詫びして訂正します。

◆編集後記◆

●今年は各地とも残雪が少なく
ゴールデンウィークの登山は、若
干拍子ぬけだったのではないでし
ょうか。4月末に山形蔵王を見ま
したが雪が少なく驚きました。し
かし天候は各地ともまーまー恵ま
れたようで、新緑の中、思い思い
の山を楽しまれたことでしょう。
●会報の編集実務は今月号から新
しく加計千穂さんをお願いしてい
ます。小生共々新人ですので、
色々迷惑をおかけするかと思いま
すがよろしく願います。原稿
はできれば会報のメールアドレス
(jac-kaiho@jac.or.jp)に送信し
ていただけると、編集が助かりま
す。支部報に掲載された海外登山
報告や、東西南北向きの原稿など、
写真つきの投稿歓迎です。

(今村 千秋)

日本山岳会会報 山 684号

2002年(平成14年)5月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
ホームページ: http://www.jac.or.jp
Eメール: jac-info@jac.or.jp
発行者 大塚博美
編集人 今村千秋
印刷 株式会社 双陽社